街かど探偵の愉しみ

不思議な感覚を味わったことがある。道後公園跡地から湯築城の遺構が発掘され、保存か開発かまだ決まっていなかったころ、発掘現場の説明会があるというので、聞きに行った。説明を聞きながら、かつてここは動物園で、小さい頃この土手に坐って弁当を食べたな、などと想い出していた。するとその時、眼の前の景色と、幼い頃見た動物園の景色と、かつて湯築城が存在していた中世の景色とが三重写しになって、眼の前に現れたような感覚にとらわれた。

もちろん、錯覚に相違ない。しかし、普段何気なく見ている風景でも、過去のエピソードを知ってながめ直すと、ありし日の姿が浮かんでくる気がするのは、誰しもあるのではないだろうか。

松山市内だと大体知り尽くしたような気がしているが、井出孫六の『ねじ釘の如く』を読んで、柳瀬正夢の父の宿屋がロープウェー街にあったと知ると、同じ景色がまったく違って見えてくる。伊丹万作らの経営したおでんや瓢太郎が二番町にあったと知った時も、同様だ。

これが東京となると、たびたび行っているようだが、地下鉄の駅と行き先を往復するばかりで、われわれが見知っている所なぞ「点と線」でしかない。最近は上京のたびに超高層ビルが増えるばかりでうんざりするが、他方歴史的な建物を保存する努力もなされており、懐が深いと感心する。建築史家の藤森照信氏は“建築探偵”を自称している。いろいろな場所を歩き回り、面白い建物を見つけては、ディテールを観察するという意味らしい。私は建築のほうは素人だからただ眺めるだけだが、たしかに惚れ惚れするような建物はある。

また、一歩裏通りに入ると昔ながらの路地が残っていたりする。さらにストーリー性–すなわちその街に著名人の住居があったとか、歴史的事件や文学作品の舞台となったなど–が加わると、街を歩いていても興味津々である。

最近出張の機会も多いので、東京での街かどウォッチングの機会を増やしたいと思っているのだが、どんな風景に出会えるだろうか。